

の見直しや新商品開発につなげるところまでを経験します。結局、何を経験させたいかによって授業と学外での実践活動を連動させることが必要です。

おっしゃること、よく分かります。特に有志ではない授業としてやる場合には、学生にどうモチベーションを持たせるか。単位を取るためと思っていた学生にも、やっている中でどう面白さを感じてもらうか。そのためにも、取り組むプロジェクトとして選ぶのは、何らかの成果が出て達成感が味わえ、アウトプットが形になるものを意識しています。

——TEEPでの経験を振り返った上で、これから実務家教員を目指す実務家に対してのアドバイスがあれば。

TEEPではいろんな先生方にさまざまなことを教えていただけたことが最大の収穫でした。自分が教員になったときに、どう振る舞うべきかを直に学べたことが大きかったです。

実務家教員の養成課程を受ける実務家の中でも、私は特に大学から最も遠い位置で生きてきました。そこで今の大学制度の基本的なことを知り、専門コースでは経営学の入り口を学べる機会が得られたことは有意義でした。

教員になった今、これから取り組もうとする人たちには、何のために実務家教員を目指すのか、どういう実務家教員を目指すのか、自分なりに具体的なイメージを持って取り組むことが重要ではないかと思っています。



オープンキャンパスでの企業連携ではコピーライティングコンテストを開催

——「進化型」や「養成プログラム」という表現は、実務家教員の「なり方」を教わるハウツー的な場という印象も持たれてしまうようです。成田さんはどのように受け止めましたか。

「進化型」は今までにない実務家教員像のことだと受け止め、私自身はハウツー的な要素は感じませんでした。ただ、「養成プログラム」という言葉が「なるため」のものかなと、受け取る側が予備校的な印象を持ってしまうこともあるのだろうと想像します。

「なった後」を考える場というコンセプトで正しいと思いますが、できれば私のような学術基盤のない実務家のためにも論文の書き方、研究の進め方などをもう少し詳しく教えてもらえたらよかったと思います(笑)。

——本日は示唆に富む貴重なご意見をありがとうございました。これからは実務を背景とする進化型実務家教員として、お互い切磋琢磨していきましょう。

2023年1月7日(土)に「2023年度基本コース・専門コース説明・相談会」を開催いたします。詳細については、Webサイトにのご案内させていただきます。

<https://teep-consortium.jp/>



TEEP コンソーシアム

中核校：名古屋市立大学
連携校：岐阜薬科大学 高知県立大学 中京大学

文部科学省「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」

TEEP

進化型実務家教員 養成プログラム NEWS LETTER

VOL.35

進化型実務家教員への扉

実務家教員に期待される大きな役割の一つに、産業界や地域社会といった現場での生きた知識や技能を教授していくことがあります。自らの経験と実務家教員ならではのネットワークを生かし、多職種連携プロジェクトなどを実施されている東海学園大学経営学部の成田互准教授に、実務家教員だからこそできる、教育や研究についてお聞きしました。
(文・鵜飼宏成)

実務家教員インタビュー ⑬

インタビュー

名古屋市立大学学長補佐 大学院経済学研究科教授
TEEP実施委員長 鵜飼宏成

移ろいゆく社会での的確な「表現」を学生と模索



東海学園大学
経営学部 准教授
成田 互さん

若者とのコミュニケーションに刺激

——まずは自己紹介から、実務家教員を志したきっかけまでを教えてください。

私は大学を出て広告会社に34年間勤めてから独立しコンサルタントをして参りました。2021年初頭に知人から大学の非常勤講師の依頼があり、ビジネスの幅を広げられ、若者から得るものも多いただろうと

思い、チャレンジしてみることにしました。

父親が高校教師だったこともあり、教員という職業にはどこか魅力を感じていました。非常勤講師をちゃんとやらないといけないと調べている中で「実務家教員」という言葉を知り、さらにその養成講座としてのTEEPの存在も知って、応募してみたところ、運よく参加できることになりました。参加後の受講途中でJREC-IN(イノベーション創出を担う研究人材のためのキャリア支援ポータルサイト)で公募を見つけ、応募したところ採用いただけることになり、この4月から教員としてスタートを切ったという経緯です。

——実際に実務家教員になってみて、やりがいがありますか。

やりがいがありすぎて(笑)、1つ1つこなすことで猛烈に毎日が過ぎて行っています。まだ半年しか経っていないので経験値はまだまだこれからですが、



TEEP コンソーシアム

中核校：名古屋市立大学
連携校：岐阜薬科大学 高知県立大学 中京大学

まずは学生たちとのコミュニケーションからはとても刺激を受けると感じました。自分とは離れた世代と接することで新しい発見があります。また、これまではチームや組織で活動することが多かったので、個人の名前で活動する職業であることにもやりがいを感じます。

——「孤独」は感じませんか。

それはとても感じます。自分で自由にできる分、その責任の重さを痛感しています。何でも自分でやらなければいけないということもそうです。知人の実務家教員から「孤独との戦い」だと聞いていましたが、その意味がやっと分かりました。それから「最先端の情報が入ってこない恐怖」というものもあります。実務をやっていると業界の最新動向や動きが自動的に入ってきましたが、実務家教員になったら自分が積極的に情報を取りに行き、人に会うなどを意識して行わないといけないのだと分かりました。最先端の実務を常にアップデートすることも研究の1つの形であると考え、実務も可能な範囲で継続していくつもりでいます。

特にメディアとの接触やSNS、デジタル技術などの世界はどんどん変わります。それによって教える内容も影響を受けますし、知っていないと間違ったことを教えてしまうことにもなりかねません。テキストも今年使ったものを来年また使うのは難しいだろうと想像しています。

——逆に実務から大学に身を置いても変わらない



番組の企画提案をしたテレビ局でのゼミ活動

ものは。

広告の世界だと「表現」を開発する上でのアプローチでしょうか。広告の文化的側面である「表現」を生み出すためのアプローチの手法はそんなに変わらないと考えています。そうした表現をどう広告で捉えていくかは個人のノウハウが大きいのですが、アプローチの仕方は変わりません。

広告は実践そのものであり、実践がない中では説明の付かないことが非常に多いと考えます。科学では同じ理論に基づけば基本的には同じ結果が期待できると思いますが、広告の分野はそうではなく、経験値などによって大きく左右されます。その経験値に基づく暗黙知を言語化、理論化していくのが私のやるべきことなのでしょうが、まだ体系化できたというレベルには至っていません。永遠のテーマだと思っています。

実社会とのギャップなくするために

——アカデミックの世界に入って戸惑いや葛藤はありましたか。

実務家教員とは何か、実務家教員は何を求められているのか、実務家教員は大学でどう位置付けられるのかといったことが大学によっても、人によっても捉え方が違うように思えます。

実務家教員にもさまざまなタイプがあるものの、私のように学術基盤がまったくない実務家教員が大学で何をできるのか、知人に同じようなタイプの他大学の実務家教員が何人かいるのですが、彼らを見ていても、大学側も明確に実務家教員像を描けていないように見えます。私自身もまさに暗中模索しています。それはやりながら作ることなのかもしれません。

もう一つは、学生の中でもやる気があって積極的な学生とそうでない学生でかなり大きな差があり、同じ土俵で教育しなければならない難しさは事前に全く想定できなかったことの1つです。

——専門職である実務家教員が担っていくべき役割は。

実社会と学生との橋渡しだと思っています。卒業後、どんな世界に行っても必要になる能力を開発し、実社会に出たときのギャップを少なくしておくことが大事だと思っています。大学において、学術基盤教員もスタッフの方々もやらないことをするのが実務家教員の役割だと思っています。

例えば、学生たちが一様に進路に悩むのは、自分が何に向いているか、何がしたいのかさえ分からないからです。学生自身が進路をどういう考え方で選択すべきなのか、どういう生き方を選ぶべきなのかが分からないので、私も一緒になって考えたいということを学生に伝えています。そのために、授業でもできるだけ学外との接点を作るようにしています。世の中がどのように動いていて、学生自身がどう動いていけるのか、何をしていると幸せなのかを感じ取らせ、頭の中を整理してあげるようにしています。そうした相談ができる親でも”先生”でもない大人、サードスペース的な身近な大人が実務家教員の役割の1つだと思っています。進路のこともですし、私に起業経験があることから起業に関することなど、ゼミ生以外の講義の受講生からの相談も意外に多く、学生一人ひとりに対して個別にやっています。

——実社会ではどんな能力が求められますか。

どんな仕事でもアイデアを生み出すための力や、チームで進めるためのノウハウを持っていなければなりません。また、社会人になると苦手な人とも一緒にやっていかなければならないので、そのためのコミュニケーション能力が求められます。

私が重要視しているのは、自分の思いを正確に相手に伝えられる「表現力」です。それが苦手な学生がすごく多い気がしています。それをどうやって身に付けるか。授業の中で示す場合もありますし、演習やグ



インフラ企業との産学連携で、若年層へのブランディングプランをプレゼンする学生

ループワークをしているときに、普段学生自身が大事だと思っていることや苦手だと思っていることがどこまでできたのか、自己評価をさせています。その自己評価と、私から見た実際の姿とのギャップを本人たちに伝えるようにしています。

これまでにない実践的な教育を

——社会課題解決の道筋や持続可能性においても、意識改革や専門職を含む多職種連携が欠かせません。経験値の社会還元をされておられる中での思いをお聞かせください。

社会課題解決型の取り組みや企業との連携は、授業としてやるのは難しいということにこの半年間で気づきました。限界があると痛感しています。多くの学生たちの頭の中は、授業は単位を取るものという認識になっていますし、15回で終わる授業では長期にわたるものは難しいです。これまでとはぜんぜん違う実践的な教育と産学連携のあり方を作らなければならないと痛切に感じています。

——私も悩みましたが、前任校では履修モデルを整え、2年にわたり学生がプロジェクトに挑戦できるようにしました。例えば食品開発プロジェクトで言えば、商品を作って終わりではなく、食べてもらって販売をしてプロモーションの見直しをして、さらに商品自体